

放射線影響研究におけるヒトゲノム研究の倫理的・法的・社会的課題：

放射線影響研究所で行う研究についてのワークショップレポート

放射線影響研究所（放影研）は、2020年12月にオンラインによる国際ワークショップを開催し、将来のゲノム研究における倫理的、法的、社会的な課題について議論しました。

近年、ヒトゲノム解析が実用化され、研究への応用が可能となりました。そこで、放影研は原爆放射線の遺伝的影響を調査するために、少なくとも一方の親が被爆者である両親と子供で構成される「トリオ」と呼ばれる家族グループのゲノム解析を計画しています。

このような調査には倫理的、法的な課題に加えて社会的な影響を伴う可能性があるため、関連する法令等についての考察や原爆被爆者ならびにその家族の方々との同意に関する対話も必要になります。そのため、ワークショップでは、個人情報の保護や、すでに亡くなった研究協力者の方々のバイオサンプル（血液等の生体試料）の使用、調査・研究にご協力いただいた方々への研究成果の還元、科学や保健・福祉面での貢献など、ゲノム研究で頻繁に取り上げられる問題について掘り下げました。

本ワークショップでの幅広い議論から、放影研では調査・研究に関わる研究協力者の方々は同時に利害関係者でもあることに視点を置き、「信頼」「合意」「社会との関係構築」等のコンセプトを持って調査・研究に臨む必要があることが導き出されました。

そして、この重要なコンセプトを確立・維持し、合意に基づく放影研のゲノム研究が滞りなく行われるための手順を確実に整備する必要があると結論付けられました。

doi.org/10.1093/jrr/rrab043

*doi (digital object identifiers) とは、ほとんどのデジタル情報に与えられた、コンテンツ（論文や作品等）独自の不変番号で、インターネットの検索を通じてオンライン資料を特定するために用いられます。

本資料は、専門家でない方向けに出来るだけわかりやすく解説することを最優先しています。そのため専門的な内容は割愛しており、論文内容を完全に再現しているものではありません。より詳しい内容は専門の学術誌に掲載された論文をご覧ください。